

自己評価報告書

平成 23年 4月 22日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20320059

研究課題名 (和文) アフリカ諸語における統語構造と声調

研究課題名 (英文) Syntax and Tone in African languages

研究代表者

梶 茂樹 (Kaji Shigeki)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：10134751

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：アフリカ諸語、統語構造、声調、インターフェース

1. 研究計画の概要

アフリカには声調言語が多く話されている。しかし、その実態は、十分知られているとは言い難い。通常、声調言語 (tone language) という場合、中国語やベトナム語、タイ語などの東アジアの大陸部の言語をイメージすることが多い。しかしながら、これらの言語とアフリカの声調言語とは、幾つかの大きな違いがある。とりわけアジア諸語では、声調の機能として単語を区別する語彙的機能が際立っているが、アフリカでは語彙的機能は一般に低い。しかしアフリカの言語では、声調の文法的機能が高い。この声調の文法的機能は、アジア諸語にはほとんど見られない。

本研究は、声調の様々な点を考慮しつつ、声調の文法的機能をアフリカ諸語において明らかにし、ひいては声調の十全な理解を提供することを目的とする。

2. 研究の進捗状況

研究代表者、連携研究者および研究協力者は、アフリカにおける現地調査によってデータを収集し、また国内での分析によって研究を推進している。さらに、論文発表並びに国内外で研究発表を行うなど、積極的に成果を公開している。

研究代表者の梶は、現在行っているウガンダ西部のバンツー系諸語、とりわけ Tooro 語と Nyoro 語について現地調査を行い、名詞の声調パターンの解析を行うと同時に動詞活用における声調パターンの分析を集中的に行っている。また統語構造と声調のデータを記録した語彙集の完成を目指している。さらに Tooro 語、Nyoro 語を含むウガンダ西部の諸言語について声調の比較研究

を行っている。

連携研究者の米田信子 (大阪大学教授) は、ナミビアの Herero 語について、名詞の声調パターンと焦点化、そして動詞の活用形との関係を集中して研究している。また活発に海外で研究発表を行っている。

連携研究者の古閑恭子 (高知大学准教授) は、ガーナの Akan 語について現地調査を行い Asante 方言の語彙と文法データの分析を行っている。また Akan 語祖語に近いとされる Fante 方言および Akuapem 方言のデータ収集を継続し、3 方言を収録した Akan 語辞書の刊行を目指している。

研究協力者の塩田勝彦 (大阪大学特任助教) は、ナイジェリア東部の Bura 語について、動詞構造のテンス・アスペクト・ムードにおける声調の現れを中心に現地調査を進めている。さらに Yoruba 語、Hausa 語の辞書と文法書を刊行している。

日本国内においては小森淳子 (大阪大学准教授、タンザニア・Kerewe 語)、神谷俊郎 (大阪大学非常勤研究員、南ア・Baka 語、Zulu 語)、若狭基道 (明星大学非常勤講師、エチオピア・Wolaytta 語)、阿部優子 (国際協力事業団、タンザニア・Bende 語)、安部麻矢 (京都大学研修員、タンザニア・Maa 語)、仲尾周一郎 (京都大学大学院生、スーダン・Pari 語) などの研究協力者と研究会などを通して連絡を密にし、アフリカ全体を視野に入れた研究を行っている。

3. 現在までの達成度

当初の予定通りに進展している。

研究代表者の梶は主としてウガンダ西部の Tooro 語と Nyoro 語について統語構造と声調との係わりを明らかにした。Nyoro 語

については名詞の声調のパターンは2つあるが動詞については1パターンしかないこと、ただし統語条件により表面上様々なパターンが出現することを明らかにした。

連携研究者の米田信子(大阪大学教授)は、ナミビアのHerero語について、先行研究では、名詞の声調パターンは焦点化が関連していると言われてきたが、名詞の声調パターンを決定しているのは焦点の有無ではなく動詞の活用形であることを明らかにした。

連携研究者の古閑恭子(高知大学准教授)は、現地調査にガーナのAkan語Asante方言の語彙と文法のデータを得た。さらに名詞修飾などの構文と声調と関係について詳細に検討した。

研究協力者の塩田勝彦(大阪大学特任助教)は、ナイジェリア東北部のBura語について、動詞構造のテンス・アスペクト・モードにおける声調の現れを中心に現地調査を進めた。

4. 今後の研究の推進方策

研究代表者、連携研究者および研究協力者が現在進めている研究を、現地調査によってさらにデータを収集し、また国内での分析によってさらに推進する。とりわけ平成23年度は本研究の最終年度であるため、成果発表に向けて取りまとめ活動を活発化させる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

梶茂樹 2009 "Tone and Syntax in Rutooro, a Toneless Bantu Language of Western Uganda", *Language Sciences*, Vol.31(2-3), 239-247, 査読有.

梶茂樹 2010 "A Comparative Study of Tone of West Ugandan Bantu Languages, with Particular Focus on the Tone Loss in Tooro", *ZASPiL*53, 99-107, 査読有.

米田信子 2009 「マテンゴ語の動詞活用形と焦点」, 『スワヒリ&アフリカ研究』20, 148-164, 査読有.

米田信子 2011 2011. Word Order in Matengo (N13): Topicality and Informational Roles. *Lingua* 121(5), 754-771, 査読有.

米田信子 2011 「ヘレロ語における動詞活用形の声調」『スワヒリ語&アフリカ研究』22, 109-131, 査読有.

古閑恭子 2009 「アカン語の名詞の声調」『言語研究』135, 151-165, 査読有

塩田勝彦 2009 「日本語・ Yoruba 語語彙集」

『民族紛争の背景に関する地政学的研究』8, 226-350, 査読有.

神谷俊郎 2010 "The Language Situation in South Africa and the Sociolinguistic Status of Zulu - Is Revival of the Indigenous Languages Possible?" 民族紛争の背景に関する地政学的研究』, 14-34, 査読有.

[学会発表] (計3件)

梶茂樹 Tone Loss in Tooro, a West Ugandan Bantu Language, 6th World Conference on African Languages, 2009年8月19日ケルン大学(ドイツ).

米田信子 2009 Object A/symmetry and Animacy Hierarchy in Herero (Bantu,R31), 6th World Conference on African Languages, 2009年8月18日ケルン大学(ドイツ).

米田信子 Tone Patterns of Herero Nominals, Academy UK-Africa Partnership: Languages & Linguistic Studies of Southern African Languages, 2009年9月22日, ボツワナ大学(ボツワナ).

[図書] (計4件)

梶茂樹・砂野幸稔(編)『アフリカのことばと社会—多言語状況を生きてということ』, 三元社, 2009, 576頁.

梶茂樹・中島由美・林徹(編)『事典 世界のことば141』, 大修館, 2009, xxiv+584頁.

塩田勝彦 2010 『ハウサ語基礎文法』大阪大学出版会, 214頁.

塩田勝彦 2011 『ヨルバ語入門』大阪大学出版会, 158頁.